

## エジプト出土のミケーネ土器模造品 —製作技法及び出土状況からの再検討—

有村 元春\*

Imitation Vessels of Mycenaean Pottery Found in Egypt:  
Reconsidering from the Manufacturing Technique and Context

Motoharu ARIMURA

本稿ではエジプトで出土したミケーネ土器の模造品を対象にし、その生産及び利用の実態を検討することによって、当時のエジプトにおける異文化受容の一側面を明らかにすることを試みた。分析の結果、ファイアンス製や石製の模造品は副葬品に特化して生産されていた可能性が高いことが明らかとなった。そして、これらの模造品は、王族や高官との結びつきが強かったミケーネ土器に対して、模造品は比較的簡素な墓からも出土していることから、ミケーネ土器を手にすることができなかった階層の人々が、その代替品として入手していた可能性が高いことが示唆された。また、これまでエジプト製と判断されていた模造土器には、必ずしも生産地を特定できない資料が多く存在することも指摘した。

キーワード：古代エジプト、ミケーネ土器、模造品、シンプルスタイル、後期青銅器時代

This paper aims to clarify the influence of Mycenaean pottery on local material culture in Egypt through the examination of manufacturing technique and use of imitation vessels of the pottery found in Egypt. The examination reveals that faience and stone imitations were produced exclusively as funerary equipment, and that imitation vessels were used by a relatively wide range of tomb owners. The presence of the imitation vessels in some modest tombs suggests those who were not able to acquire “genuine” Mycenaean pottery used the imitation vessels as alternatives. Also, the examination of each imitation pottery in detail revealed that some of the materials recognized as Egyptian imitation in previous studies belong to the Simple Style. In addition the origin of “piriform imitation stirrup jar” cannot be determined without scientific analysis, such as NAA being undertaken.

Key-words: Ancient Egypt, Mycenaean pottery, imitation, Simple Style, Late Bronze Age

### 1. はじめに

後期青銅器時代の東地中海地域では、高価な油や液体、内容物が小型の土器に収められ、各地で活発に流通した。このような輸送に適した土器は各地で生産されたが、主にギリシャ本土で生産されたミケーネ土器は東地中海地域の広範囲に渡って流通した。エジプトにミケーネ土器がもたらされるのは新王国時代の第18王朝の頃からで、第20王朝になるとほぼ流通しなくなるが知られている。中でも第18王朝のアクエンアテン（Akhenaten）の治世に大量に輸入されたことが、当時の王都アマルナ（Amarna）における豊富な出土例から明らかになっている（Petrie 1894）。そして、この輸入土器の流通を受け、在地で模造品の生産が行われることになる。

エジプトでは輸入土器の模造品生産が古くから行われていたが、生産されたのは専ら粘土を材料とした模

造品（模造土器）であった。ミケーネ土器の模造品も例外ではなく、ナイルシルトとマルクレイの2種類の胎土を用いて製作されていることがわかっている（Ayers 2015: 1942）。しかし、他の輸入土器の模造品とは異なり、模造する際の原材料としてファイアンスや石も用いられていることが、エジプトで生産されたミケーネ土器の模造品の特徴として挙げられる<sup>1)</sup>。エジプトにおいてミケーネ土器は、ミケーネ土器流通以前の輸入土器とは明らかに異なった受容がなされていたことがうかがえるのである。

エジプトにおけるミケーネ土器の模造品を対象としたこれまでの研究には、模造品の製作技法とその利用について網羅的に資料を扱った議論が行われてこなかったという課題がある。

そこで、本稿ではまずエジプトで出土しているミケーネ土器の模造品について整理し、模造品の製作と

その利用の両側面について検討を進める。そして、その検討を踏まえ、当時のエジプトにおいてミケーネ土器がどのように受容され、どの程度在地の物質文化に影響を与えたのか明らかにしていきたい。

## 2. 先行研究

エジプトでミケーネ土器の模造品が出土することは19世紀末の段階で知られていたが、それを主な対象とした研究は長らく行われてこず、1970年代まではH. G. ブフホルツ (Buchholz) の論考内における、エジプトで出土したミケーネ土器の模造品リストの提示に留まっていた (Buchholz 1974: 458)。しかし、1980年代以降になると、エジプトで出土したミケーネ土器の模造品が展覧会にしばしば出品されるようになったため、展覧会図録での記述を通して、少しずつ情報や研究成果が蓄積していった。その端緒となるのが、ボストン美術館で開催された展覧会「Egypt's Golden Age」である。この展覧会ではエーゲ海地域に由来する土器の模造品がまとめて展示され、図録におけるこれらの模造品に関する記述は、E. バームール (Vermeule) が担当した (Vermeule 1982)。この図録の内容は網羅的ではないものの、展覧会に出品されていない資料や類例などが紹介されている。そのため初の模造品に関するまとまった報告として評価することができる。

この展覧会図録の刊行を受けて、翌年M. ベル (Bell) は、バームールが提示した情報に関して多岐にわたる細かな修正や指摘を行なった (Bell 1983)。同論考内では事実確認だけでなく、2つの重要な点が記されている。1つ目は、文様が類似するファイアンス製の模造品が存在することから特定の工房があった可能性を指摘している点である (Bell 1983: 19)。2つ目が、ファイアンス製の鏡壺が化粧用容器として生産されたと述べ、模造品生産の目的について言及した点である (Bell 1983: 17)。残念ながら、ベルのこの論考以降ミケーネ土器の模造品を主題に据えた研究は行われず、しばらくの間、展覧会図録における個々の資料の解説に留まることとなった。

近年になって、N. エアーズ (Ayers) によってミケーネ土器の模造品に関する論考が発表された (Ayers 2015)。彼女はエジプトで出土した鏡壺・巡礼壺・酒杯の模造品を対象資料とし、出土状況及びその状況から推定しうる模造品の機能について検討している。また、この論考における記述からは、エアーズが基本的に実測図を元に模造品がエジプト製か否か判断していることがわかる (Ayers 2015, n. 41)。そして、エジプトで出土するミケーネ土器の模造品は全てエジプト製の模造品として扱っている。

一部の模造品の生産地についてエアーズが示した見解と対立する意見を述べたのが、V. ガスペリーニ (Gasperini) である。ガスペリーニは長年議論的となってきた「グラーブの被熱一括遺物群 (Gurob burnt group)」<sup>2)</sup>の再検討を行なった (Gasperini 2018)。この遺物群に含まれており、エアーズがエジプト製と判断した2点の模造土器について、ガスペリーニはレヴァント地域に類例を求め、それらも同様に当該地域で生産されたものだと指摘した (Gasperini 2018: 231, 256)。

また、現在最も有用な集成としては、E. シラー (Schiller) の著作を挙げるができる (Schiller 2018)。しかしながら、この著作では集成した個々の資料の帰属年代や来歴についての記述が充実しているものの、それぞれの模造品の特徴に関しては簡単な記述にとどまっておき、十分な考察には至っていないのが実情である。

## 3. 先行研究の問題点と分析の目的

先行研究の問題点として挙げられるのは、これまでミケーネ土器の模造品についての包括的な検討がなされてこなかった点である。特に模造品の製作に関する側面に重点が置かれることがなく、ファイアンス製品に関しては成形技法については言及されているものの、文様に関してはまとまった研究が行われていない。また模造土器においてはいくつかの資料の胎土に関する記述以外では、「形状がそれぞれで異なっている」といった言及にとどまっているのである。

模造土器に関しては、その生産地の推定にも大きな問題がある。これに関連して、エジプトで出土する模造品研究ではほとんど言及されることのない、「シンプルスタイル」と呼ばれる土器について触れておく必要がある。初めてこの言葉を用いたのがA. フルマーク (Furumark) で、当初の定義では「レヴァント地域やエジプトなどで見られる、本物のミケーネ土器及び在地の模造品とは区別される土器」(Furumark 1941b: 116)とされている。シンプルスタイルはギリシャ以外の地で生産された「広義の」模造品であるが、それぞれの地域の個々の工房で製作された1点1点異なる特徴をもつ模造土器とは異なり、文様や器形に共通性のある一群を指す。本来のミケーネ土器は太い帯と細い線の組み合わせで胴部が装飾されるが、それに対して太い帯だけ描かれているものが典型的なシンプルスタイルで、図1に示したように胴部に幅広の帯が施されるものが多い (Koehl and Yellin 2007)。そして、シンプルスタイルの生産地については、キプロス島やレヴァント地域が主だったことが明らかになっている (e.g. Badre et al. 2005; Koehl and Yellin 2007)。こ

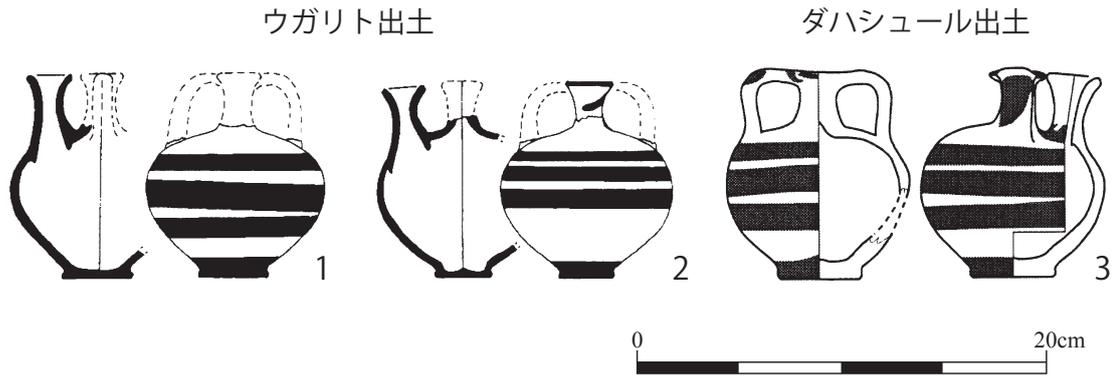


図1 シンプルスタイル (Yon et al. 2000, fig. 15; 吉村ほか 2016, 図 19.8 を元に作成)

のような土器の存在に言及することなく、エジプトで出土している「ミケーネ土器の特徴的な器形をもつ一方で本来のそれとは異なる様相の土器」は皆、エジプト製の模造品として考えられてきたのである (e.g. Ayers 2015; Schiller 2018)。

また、製作に関する側面に加え、模造品の利用についても検討の余地がある。例えば、出土状況についてはエアーズも考察を行なっているが、資料の見落としや、他の解釈の提示が可能なものなどもある。さらに、副葬品として出土した場合の被葬者の階層など、利用していた人々に関する検討も行われていない。

以上の課題を踏まえ、まず本稿では、個々の資料について情報を整理する。そして、それを踏まえ、製作技法や模造の目的、さらに模造品の利用についても検討を行う。このように、ミケーネ土器の模造品生産及びそれらの利用の様相を包括的に検討することによって、当時のエジプトにおいてミケーネ土器がどのように受容され、在地の文化に影響を与えたのかといった異文化受容の一側面について明らかにすることが、本稿の目的となる。

#### 4. 方法

対象資料は、シラーの集成資料がベースとなるが、その集成から漏れている資料でエジプト製の可能性が指摘されてきたものも、筆者が確認しうる限り追加している。また、アシュモレアン博物館とピートリ博物館で行なった資料調査で筆者が実見することができた資料も複数あり、それらについてはより詳細に検討を行なっていきたい。

分析を進めるにあたり、どの器形をミケーネ土器の模造品とみなすかという問題があるが、本稿では角杯と胴部が横から見た場合に正円に近い形状を呈する巡礼壺の模造品は、ミケーネ土器の模造品として扱わないこととする (c.f. Ayers 2015)。なぜなら、前者の模造品は基本的にミケーネ土器流通以前の第 18 王朝

前半に生産されており、クレタ島で生産されたミノア土器の影響を受けていると考えるのが妥当と判断されているからである (Koehl 2006)。また、後者はギリシャのみならずレヴァント地域からも輸入され、なおかつ新王国時代にはエジプト在地の土器のバリエーションにも取り込まれており、一概にミケーネ土器の模造品と判断することが難しいためである。

そして、胎土・成形技法・文様といった製作に関する側面や出土状況を分析項目として設定する。分析を進める際には、便宜的に素材ごとに検討していく。また、エジプトで製作されたファイアンス製模造品や石製模造品は、キプロス島やレヴァント地域に輸出されていることが知られている。製作に関する側面を考える上で、海外に輸出された資料に言及するのは有益なことだと考えられるため、適宜外部地域で出土している資料も参照しながら論を進めていくこととする<sup>3)</sup>。

#### 5. 分析

##### 5-1. ファイアンス (図 3, 4)

エジプトで出土しているファイアンス製模造品は 27 点で、器形は鏡壺と巡礼壺である。グラープからソレブ (Soleb) まで広範囲で出土が確認されている (表 1、図 2)<sup>4)</sup>。製作年代の幅は第 18 王朝から第 19 王朝にかけてである (Schiller 2018: 48-55)。また、輸出されたと考えられる模造品はキプロス島で 7 点、レヴァント地域で 1 点出土している (表 2、図 5)<sup>5)</sup>。

##### 5-1-1. 成形技法と形状

これまで指摘されているように型を利用する方法や、椀状のものを 2 つ組み合わせる方法の、2 種類を用いて胴部が作られている (Bell 1983: 18)。鏡壺のサイズに関しては概ね器高が 5-7 cm の範囲に収まり、基本的に 10 cm 以上の高さがある本来の鏡壺よりは (Furumark 1941a: 610-615)、小型に作られていることがわかる<sup>6)</sup>。巡礼壺 (F3、図 3. 3) はキプロ

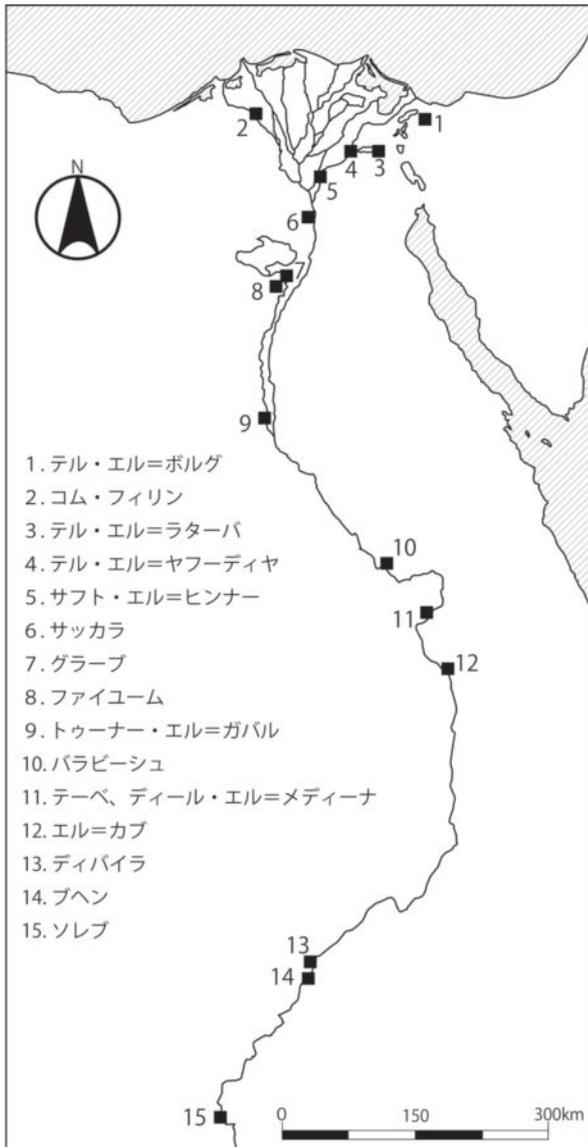


図2 エジプト製、もしくはエジプト製の可能性が指摘されてきた模造品の出土遺跡

ス島の事例 (Fex.4、図5. 4) も同様に、罌壺よりも大きめに作られている。

また、容器の最大径に対して器高が低い扁平な形のものが多い。そして、F5 (図3. 5) の1点を除くと全て台付きであり、本来の罌壺の底部と非常によく似ている。

#### 5-1-2. 文様

ファイアンス製の模造品には基本的に何らかの装飾が施されており、無地のものは現在確認しうる限り存在しない。図6ではファイアンス製模造品に描かれる代表的なモチーフを例示した。肩部や胴部に加え、把手や、F2 (図3. 2)・F6 (図3. 6) のように把手の中央の円形の部分 (ディスク) にも文様が描かれている。

まずは胴部や肩部に描かれた帯状の文様についてみていく。これは従来から指摘されてきたことだが、図6. 帯. 1の「ジグザグ文様」(Bell 1983, Ayers 2015) や「バスケットパターン」(Jacobsson 1994: 43) と呼ばれている、斜線で三角形を作り、それを上下反転させて帯状にする文様が描かれている資料が複数みられる (Bell 1983: 19; Ayers 2015: 1938)。現在確認されているファイアンス製模造品のうち、キプロス島出土資料も含めると11点にジグザグ文様が描かれている。ただし、ジグザグ文様は同じでもその描き方、緻密さ、線の均等さといった点では、それぞれの資料にばらつきがあることがわかる。また水を表すとされる図6. 帯. 2-4, 6の文様も複数の資料に描かれている。

次に帯状ではなく独立して用いられる文様であるが、2本の線の間点に点が並んでいるものや (図6. 独立. 幾何学文様. 3)、十字文様 (図6. 独立. 幾何学文様. 2, 4) は複数の模造品で共通する文様である。また上記のような幾何学的な文様だけではなくナイル川流域に生息する動植物の図像や、聖刻文字が描かれるものも複数存在している。例としてはF1, 3, 13, 19, 21 (図3. 1, 3; 図4. 1, 7, 9)、そしてキプロス島で出土しているFex4がある。

把手には文様が描かれる場合とそうでない場合がある。前者の場合、図6のような3種類が確認されている。中でもハシゴ状に描かれるものが多い。

また、ディスクについてもいくつかのバリエーションが存在する。これは本来のミケーネ土器において、LH IIIB期<sup>7)</sup>までは同心円か渦巻き文様しか描かれなかった部位である。

ミケーネ土器の装飾に多く見られる太い平行線が描かれる資料は、ファイアンス製模造品ではF23 (図4. 11) の1点のみである。また、本来の罌壺や巡礼壺はしばしば注口の縁が彩色されるが、注口の縁に彩色があるものは、同様にF23のみである。

#### 5-1-3. 出土状況

ファイアンス製模造品の中でグラーブ (F2)、ディバイラ (Debeira) (F8)、ブヘン (Buhen) (F9)、ソレブ (F10) で出土した4点は、副葬品として用いられていたことが分かっている。これらのうち模造品が置かれていた本来の位置にまで言及できる資料は1点である。それはF2のグラーブ217号墓 (土墳墓) からの出土資料で、いくつかの化粧用容器や樹脂の塊とともに籠の中に入った状態で発見されたことが報告されている (Brunton and Engelbach 1927: 12, pl. 15; Ayers 2015: 1940)。

墓の構造に言及できるのは上記の1点に加え、以下の2点がある。1つ目がF8で、土墳墓から出土している (Säve-Söderbergh 1964: 31)。2つ目がF9で、

表1 エジプトで作られたファイアンス製模造品 (エジプト出土)

番号	器形	遺跡	サイズ (cm)	出土場所	博物館所蔵番号	出典	図版
F1	罍壺	サッカラ	7.8(H), 3.0(Base)	不明	CM, CG 3677	von Bissing 1902: 22 Schiller 2018: 50(B4), 170	図3.1
F2	罍壺	グラープ	8.3(H), 8.6(W)	217号墓	AM, AN1921.1310	Brunton and Engelbach 1927, pl.xxx.97B Schiller 2018: 49(B2), abb.43	図3.2
F3	巡礼壺	グラープ	10.5(H), 12.1(W)	不明	MM 659	Petrie 1891, pl.xx.1 Gasperini 2014: 14, fig.5 Schiller 2018: 61(F2), 179	図3.3
F4	罍壺	グラープ	6.7(H), 6.8(W)	不明	UC 16630	Schiller 2018: 52(B14), abb.42	図3.4
F5	罍壺	トゥーナール・エル＝ガバル	6.5(H), 6.8(W)	不明	ECM1632	Spurr et al. 1999: 32 Schiller 2018: 52(B13), 173, abb.41	図3.5
F6	罍壺	トゥーナール・エル＝ガバルで購入	7.1(H), 6.8(W)	不明	AN1922.77	Schiller 2018: 53(B17), 174, abb.46	図3.6
F7	罍壺	トゥーナール・エル＝ガバルで購入	7.8(H), 6.8(W)	不明	AN1922.78	Schiller 2018: 53(B15), 173-4	図3.7
F8	罍壺	ディバイラ	6.9(H), 7.8(W)	218地点, 12号墓	UGM, SJE218/12.01	Säve-Söderbergh 1964: 31, pl.6.b Schiller 2018: 49 (B1), 170, abb.44	図3.8
F9	巡礼壺	ブヘン	6.7(H), 6.0(W)	H80号墓	PM E10290	MacIver and Woolley 1911: 164 Schiller 2018: 61(F1), 179, abb.68 <a href="https://www.penn.museum/collections/">https://www.penn.museum/collections/</a>	図3.9
F10	罍壺	ソレブ	6.5(H), 7.0(W)	17号墓	PCSG, 49	Giorgini 1961, tab.25.17 T 24 Hankey 1993: 114 Schiller 2018: 50(B3), 170, abb.38	図3.10
F11	巡礼壺	出土地不明	5.9(H), 6.5(W)	不明	MRAH, E3064	Schiller 2018: 61(F4), 179, abb.67	図3.11
F12	罍壺	出土地不明	6.0(H)	不明	MCAB?	Furtwängler and Loeschcke 1886: 32, fig.19 Schiller 2018: 50(B7), 171	図3.12
F13	罍壺	出土地不明	6.76(H), 7.05(W)	不明	EA35413	Hankey 1995, taf.23 Schiller 2018: 52(B11), 173, abb.39	図4.1
F14	罍壺	出土地不明	6.73(H), 6.96(W)	不明	BM.1899.0314.3 (EA30451)	Hall 1901: 185, fig.52 Schiller 2018: 52(B12), 173, abb.40	図4.2
F15	罍壺	出土地不明	6.8(H)	不明	SCÉ, 1400	Spiegelberg 1909: 22 Schiller 2018: 52(B10), 172	図4.3
F16	巡礼壺	出土地不明	7.9(H), 7.5(W)	不明	MdL, 11904	Schiller 2018: 61(F3), 179, abb.69	図4.4
F17	罍壺	出土地不明	6.4(H), 6.2(W)	不明	MdL, N1003A	Schiller 2018: 53(B18), 174, abb.50	図4.5
F18	罍壺	出土地不明	5.9(H), 6.2(W)	不明	FM E5.1928	Bourriau 1981: 138, no.270 Schiller 2018: 53(B16), 174, abb.45	図4.6
F19	罍壺	出土地不明	7.2(H), 3.8(Base)	不明	CG 3676	von Bissing 1902: 21 Schiller 2018: 51(B5), 170	図4.7
F20	罍壺	出土地不明	6.4(H), 7.6(W)	不明	MdL, E11905	Schiller 2018: 53(B19), 174, abb.51	図4.8
F21	罍壺	出土地不明	6.5(H)	不明		Friedman 1998: 137 Schiller 2018: 50(B6), 171	図4.9
F22	罍壺	出土地不明	6.9(H), 7.5(W)	不明	AKM, 1935.200.392	Schiller 2018: 61(B9), 172, abb.37	図4.10
F23	罍壺	出土地不明	7.7(H), 8.4(W)	不明	MFABu, 52.582	Schiller 2018: 53(B22), 175, abb.47	図4.11
F24	罍壺	出土地不明	5.9(H), 6.6(W)	不明	MRAH, E7350	Schiller 2018: 53(B21), 175, abb.48	図4.12
F25	罍壺	出土地不明	6.5(H), 6.2(W)	不明	MdL, N1003B	Schiller 2018: 53(B20), 175, abb.49	図4.13
F26	罍壺	出土地不明	7(H), 7.2(W)	不明		Ben-Tor 2016: 81	図4.14
F27	罍壺	出土地不明	14.9(H), 12(W)	不明	SLAM, 177.1925	Vermeule 1982: 156, no.166 Schiller 2018: 51-2(B8), 172, abb.36	図4.15

前庭部と1つの部屋をもつ岩窟墓で見つかっている (MacIver and Woolley 1911: 164)。

その他の資料については出土遺跡すらわかっていないものもあるが、壊れやすいファイアンス製であるにも関わらず比較的残存状況が良い資料が多いため、その多くは未盗掘ないしそれに近い状態の墓から出土したのではないかと推測できる。

また、エアーズはソレブの神殿付近でファイアンス製罍壺の注口が出土したとしている (Ayers 2015: 1941)。しかし、引用元を確認してみると、確かに罍壺の注口については出土していることが報告されているものの、「ファイアンス」の記述はない (Leclant 1963: 204, n.1)。したがって、現在エジプトで出土したファイアンス製のミケーネ土器模造品で出土状況が明らかになっているものは、全て副葬品として利用されたものである。

## 5-2. 土器 (図7, 8)

粘土で模造された資料は計18点で、器形は全て罍壺である (表3)<sup>8)</sup>。テル・エル＝ボルグ (Tell el-Borg) からエル＝カブ (El-Kab) にわたる範囲で出土が確認されており、製作された年代の幅は第18王朝から第20王朝までである (Schiller 2018: 56-59)<sup>9)</sup>。器高は10 cm前後であり、本来の罍壺の器高と大きな乖離はない。

### 5-2-1. 胎土

まずエアーズはグラープの被熱一括遺物群に含まれていたアシュモレアン博物館所蔵の3点の罍壺 (AN1890.891, AN1890.990 [P1、図7.1], AN1890.1074 [P2、図7.2])<sup>10)</sup> を例に挙げ、根拠を示すことなくエジプト製としている (Ayers 2015: 1942-1943)。このうちAN1890.891に関しては、明らかにエジプト製の模造品

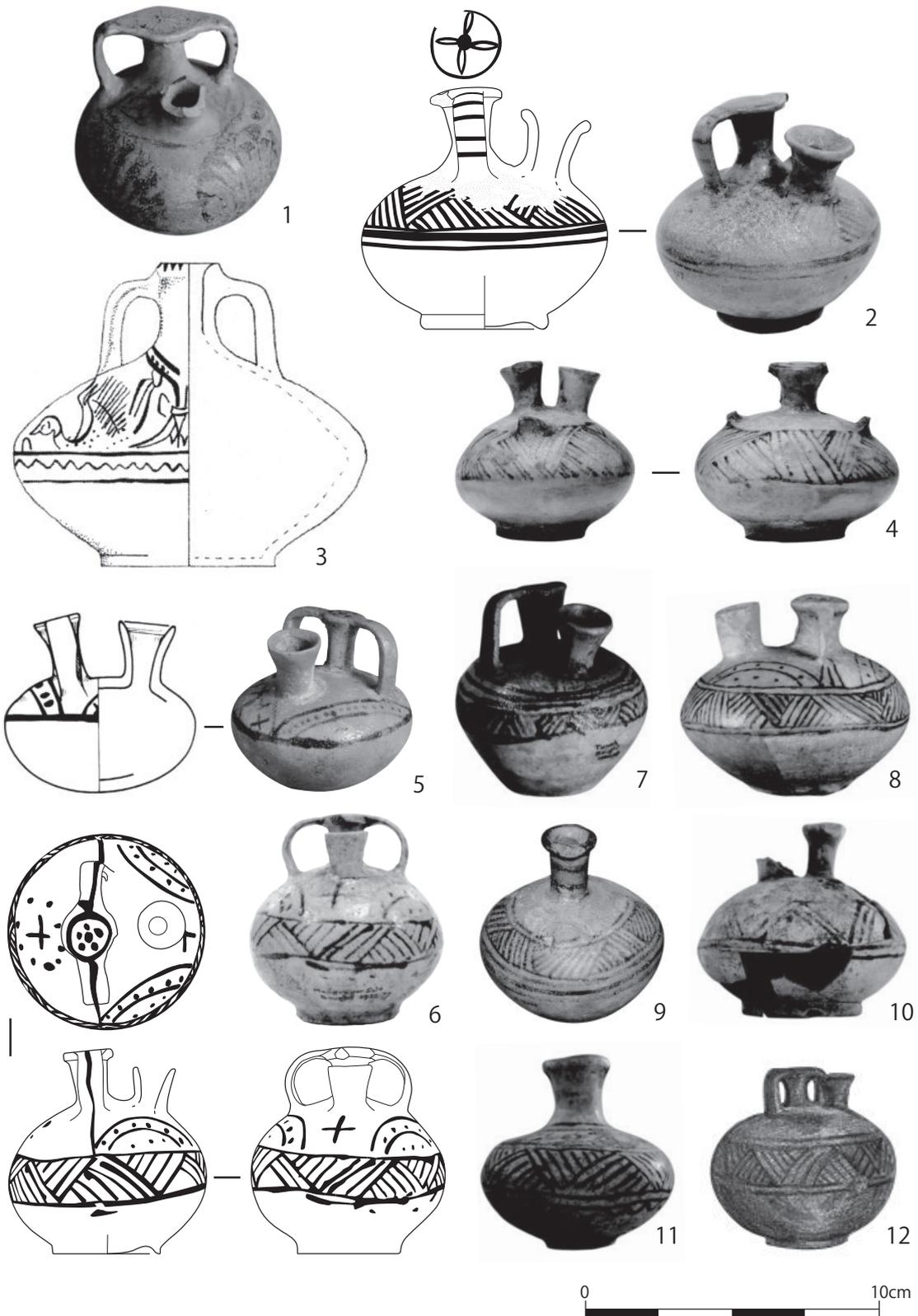


図3 ファイアンス製模造品 (1) (1, 2, 4, 6, 7は筆者撮影及び作成。その他は表中の参考文献内の図版を元に作成)



図4 ファイアンス製模造品 (2) (1, 7は筆者撮影及び作成。その他は表中の参考文献内の図版を元に作成)

表2 エジプトで作られたファイアンス製模造品 (外部地域出土)

番号	器形	遺跡	サイズ (cm)	出土場所	博物館所蔵番号	出典	図版
Fex1	鏡壺	エンコミ	8.0(H), 8.1(W)	80号墓	BM,1897,0401.1143	Jacobsson 1994: 44, pl.55.232 <a href="https://www.britishmuseum.org/research/collection_online/">https://www.britishmuseum.org/research/collection_online/</a>	図5.1
Fex2	鏡壺	エンコミ	6.2(H), 6.6(W)	5号墓	MdL, AM2106	Schaeffer 1952: 195, pl.xxxviii.260 Jacobsson 1994: 44, no.233	図5.2
Fex3	鏡壺	キプロス島	7.1 (H)	ダリ付近の墓		Cesnola 1903, pl.cix:2 Myres 1914 p.273, no.1572 Jacobsson 1994: 44, no.231	図5.3
Fex4	巡礼壺	キプロス島	11.4(H), 13.3(W)	ダリ付近の墓	MMA, 74.51.5073	Cesnola 1903 pl.cix:1 Myres 1914: 273, no.1570 Jacobsson 1994: 43, no. 224	図5.4
Fex5	鏡壺	エンコミ	7.3(W)	87号墓		Jacobsson 1994: 44, pl.15.230, 82.230	図5.5
Fex6	巡礼壺	キプロス島	6.7(H), 6.8(W)	不明		Jacobsson 1994: 43, pl.6.226, 88.226	図5.6
Fex7	鏡壺	ラクシュ	6.2(残存)	神殿	BM, 1980,1214.13505	Tufnell 1940: L.II, pl.xxiii.63 Schiller 2018, abb.52	図5.7
Fex8	巡礼壺	キプロス島	6.2(H), 7.4(W)	不明	CyM, 1968/V-30/299	Jacobsson 1994: 43, pl.13.228	なし



図5 外部地域で出土しているファイアンス製模造品

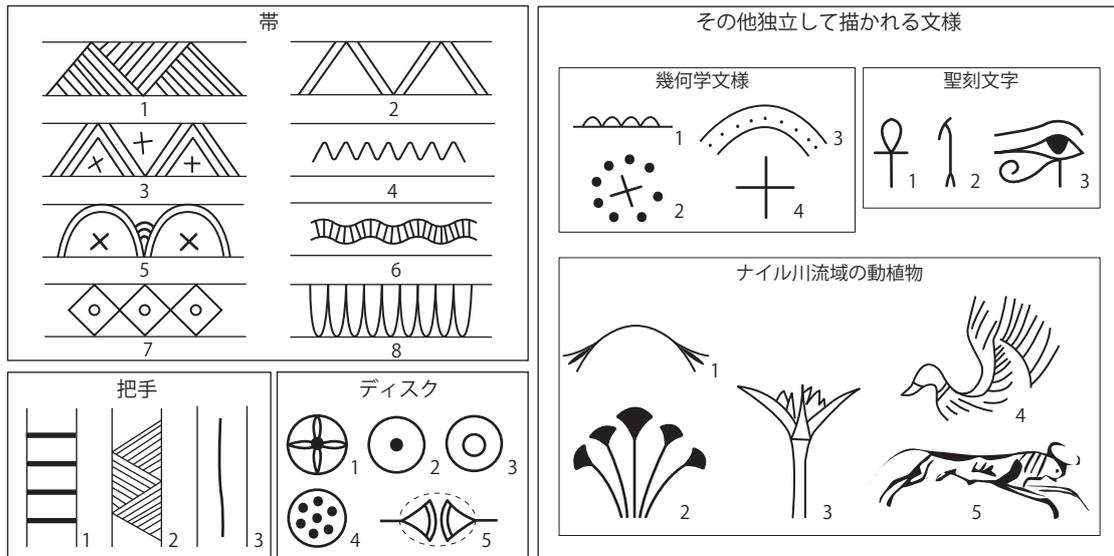


図6 ファイアンス製模造品に描かれた文様

ではないことを同博物館における資料調査の結果確認しているため、検討の対象とはせずに、P1, 2についてみていきたい。P1のみを報告したF. ピートリ (Petrie) は、胎土に関して「native ware」という表現をして、在地の模造品であることを主張している (Petrie 1891: 18)。そして後で詳しく述べるが、ガスペリーニはP1, 2をレヴァントで生産されたものだと想定している (Gasperini 2018: 198, 243)。しかし、これらの土器の大きな問題は、いずれも完形かつ全体が黒焦げになっている点である。したがって胎土を観察することができないため、これらの生産地はエジプトであるとも他の地域であるとも結論づけることができない。

同様に、筆者が実見して生産地の判断がつかなかった資料として、P3 (図7. 3)、P4 (図7. 4) が挙げられる。テル・エル＝ラターバ (Tell el-Retaba) で出土したP3は表面の風化が激しい。さらに、欠損箇所が注口が取り付けられていた穴に至るまで全て石膏で埋められてしまっているため、胎土を観察することができない。コム・フィリン (Kom Firin) で出土したP4は完形で、なおかつP3同様、風化しているため、肉眼でおおよその生産地を特定することは難しい。

また、エジプト製である可能性が指摘されているものの、その確証がない資料としてはP5 (図7. 5)、P6 (図7. 6)、P7 (図7. 7)、P8 (図8. 1)、P13 (図8. 6) がある。テーベ (Thebes) で出土したP5については、エジプトの土器研究の大家であるJ. ボリオ (Bourriau) がエジプト製である可能性を指摘している (Bourriau 1981: 138)。しかしその一方で、既知のエジプトの胎土のいずれにも分類されないと述べ、確実にエジプト製であると結論づけるには、さらなる

分析を必要としている点に注意しておく必要がある (Bourriau 1981: 138)。P6とP7に関しては、シラーがエジプト製として報告しているが、胎土についての具体的な言及はない (Schiller 2018)。テル・エル＝ボルグ出土のP8は、「エジプトの粘土」とのみ報告されている (Hoffmeier 2014: 498)。また、パラビッシュ (Balabish) で出土したP13については、この遺跡の発掘を行ったウェインライト (Wainwright) が、同遺跡で出土している本物のミケーネ土器とは異なる胎土であることからエジプト製と推測し、W-classとD-classに似ていると報告している (Wainwright 1920: 66)。W-classやD-classという語はピートリが行った先王朝時代の土器の分類で用いられたもので、これらは基本的にマールクレイとされている (Friedman 1994: 98; 馬場 2013: 37)。しかし、ピートリがW-classとした土器にはレヴァント産の土器も含まれていることが明らかになっているため (Payne 1993: 127)、注意が必要である。

そして、エジプト製とされてきた資料で、実際にはシンプルスタイルである可能性が高いと指摘できるのが、サフト・エル＝ヒンナー (Saft el-Hinna) 出土のP9 (図8. 2) とグループ出土のP12 (図8. 5) である。

エジプトの胎土として具体的に言及できるのは、以下の資料である。まずナイルシルトで作られたものはP10 (図8. 3) とP14 (図8. 7) で、筆者がピートリ博物館において確認した。P10と同じ墓で出土したP11 (図8. 4) は、外面の色調や調整がP10と酷似しているため、胎土も同様にナイルシルトである可能性が高い。また、P18はマールクレイで製作されていることが報告されている (Bell 1982: 150)。

表3 エジプトで作られた可能性が指摘されている模造土器

番号	器形	遺跡	サイズ (cm)	出土場所	博物館所蔵番号	出典	図版
P1	罍壺	グラープ	10.4(H), 8.2(W)	被熱一括遺物群1	AN 1890.990	Gasperini 2018: 198 Schiller 2018: 175(N2)	図7.1
P2	罍壺	グラープ	10.5(H), 7.8(W)	被熱一括遺物群3	AN 1890.1074	Gasperini 2018: 243 Schiller 2018: 175(N1)	図7.2
P3	罍壺	テル・エル＝ラターバ	11.0(H),	不明	UC19193	Petrie 1906: 33, pl.xxxvi.14	図7.3
P4	罍壺	コム・フィリン	10.5(H)	墓	CM, JE89420	Spencer 2008: 15 Schiller 2018: 176(N3)	図7.4
P5	罍壺	テーベ	10.7(H), 8.0(W)	岩窟墓	AN1896-1908 E2463	Stubblings 1951: 99 Bourriau 1981: 138 Schiller 2018: 177(N12)	図7.5
P6	罍壺	出土地不明	12.0(H), 8.8(W)	不明	FM E.1984	Schiller 2018: 177(N11), abb. 56	図7.6
P7	罍壺	ファイユーム	10.5(H)	不明	ÄM, Berlin 10280	Schiller 2018: 177(N13), abb. 57	図7.7
P8	罍壺	テル・エル＝ボルグ (残存推定)	10.6(H), 9.6(W)	第19王朝の要塞		Hoffmeier (ed.) 2014: 498, chap.11-pl.1:4	図8.1
P9	罍壺	サフト・エル＝ヒンナー	10.9(H), 8.3(W)	不明	BMAH, E.2604	Ayers 2015, fig.2 Schiller 2018: 176(N8), abb.58	図8.2
P10	罍壺	テル・エル＝ヤフーディヤ	10.0(H), 8.8(W)	第20王朝の墓	UC 18989	Griffith 1890: 44, 46, pl.xv.15 Ayers 2015 p.1944 Schiller 2018: 176(N7)	図8.3
P11	罍壺	テル・エル＝ヤフーディヤ	9.3(H), 9.0(W)	第20王朝の墓	MFABo, 88.987	Griffith 1890: 44, 46 Ayers 2015: 1944 Schiller 2018: 176(N6)	図8.4
P12	罍壺	グラープ	10.0(H), 8.3(W)	37号墓		Brunton and Engelbach 1927, pl.xxx.97B Schiller 2018: 177(N10)	図8.5
P13	罍壺	バラビージュ	11.0(H), 9.4(W)	160号墓		Wainwright 1920, pl.xxv.87 Schiller 2018: 177(N9)	図8.6
P14	罍壺	エル＝カブ	9.5(H), 11.0(W)	墓	UC19117	Unpublished	図8.7
P15	罍壺	コム・フィリン	10.7(H), 11.2(W)	墓		Schiller 2018: 176(N5)	なし
P16	罍壺	テル・エル＝ヤフーディヤ	不明	第20王朝の墓		Griffith 1890: 44, 46 Ayers 2015: 1944	なし
P17	罍壺	グラープ	不明	不明	Ash 897.1889	Stubblings 1951: 95	なし
P18	罍壺	ディール・エル＝メディーナ	不明	不明		Bell 1983: 150	なし

## 5-2-2. 成形技法と形状

基本的にろくろを用いて製作されているが、例外としてディール・エル＝メディーナ (Deir el-Medina) で出土した罍壺は、ろくろを使わずに製作されている (Bell 1982: 150)。

エアーズは、エジプト製のミケーネ土器の模造土器は、ファイアンス製や石製の模造品と比べて器形・文様の統一感がないと指摘している (Ayers 2015: 1942)。たしかに「1点物」の形状の模造品が多い。しかしながら、彼女が集成した「エジプト製の模造土器」の全貌は不明であるが、シラー及び筆者が確認している模造土器を見ると、明らかに類似する一群が存在していることがわかる。それがP1-7の7点である。これらは、1) 洋梨を上下反転させた形状、2) 把手の厚みが約1cm、3) P13のような例とは異なり、把手の内側と肩部との接地面が滑らかにされていない、4) 注口がほぼ同じ太さで垂直気味に立ち上がる、という特徴を共通して持っている。これらの土器の類似性については、先行研究ではほとんど言及されておらず、ガスペリーニが被熱一括遺物群に含まれているP1, 2の類例としてP5に言及したに過ぎない (Gasperini 2018: 256)。そしてP5の資料に加え、彼女は形態的特徴から図9に示したテル・エル＝ファラ (Tell el-Farah) 南と、ウガリト (Ugarit) で出土した罍壺の模造品を類例として紹介し、レヴァント地域で製作されたも

のであると主張している (Gasperini 2018: 231, 256)。残念ながら、先述の通りこれらの資料は全て容易に胎土を確認することができないため、理化学的な分析を無くして生産地を求めることは現状困難である。

また、筆者が実見できた中で、興味深い製作技法が用いられていることが明らかになった例を2つ挙げる事ができる。1つ目がP10である。この資料で興味深いのは、古代エジプトで新王国時代から土器を作る際にしばしば用いられた綴じ込み技法によって、底部が作られていることである。この資料の底部は、マールクレイで作られたアンフォラの底部のように若干尖底になっている。

2つ目が、P14である。これはろくろを用いて底部から開口部まで連続して成形するのではなく、2つの皿/椀を組み合わせる方法で作られている。そしてそれぞれに底部、開口部を設けている。これはエジプトやレヴァント地域でよく生産されたような扁平な巡礼壺を作る方法と類似している (e.g. Rose 2007: 285)。この資料を作り出した工人はこの方法を横向きに適用するという発想により、本物の罍壺でも見られるような扁平な形を作り出している。そして興味深いのは把手の部分も開口部にしているという点である。この点については本来の器形にエジプトの工人が「独自性」を加えたものといえる。

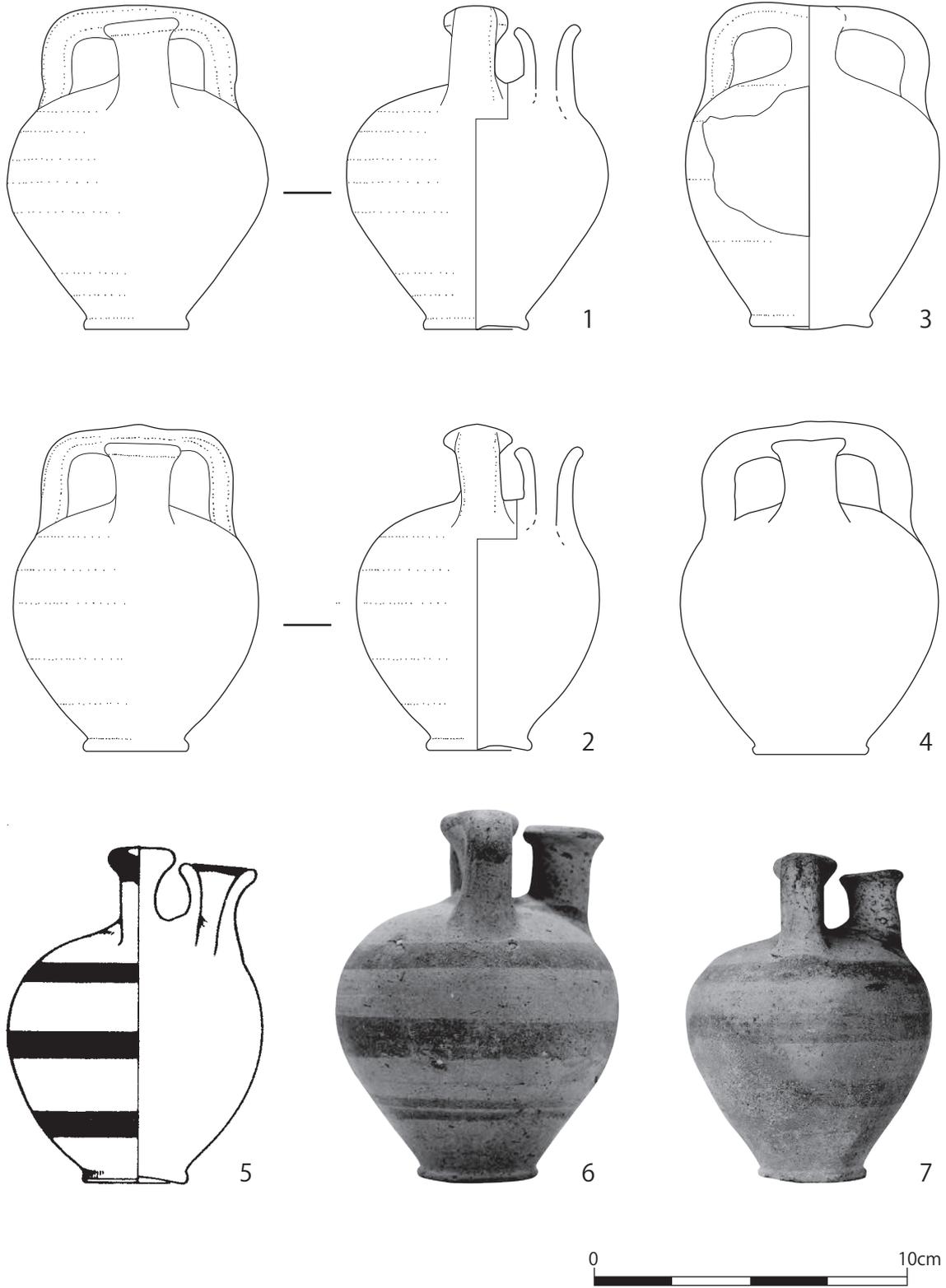


図7 模造土器 (1) (1~4は筆者作成 [4は筆者撮影の写真をトレース]、その他は表中の参考文献内の図版を元に作成)

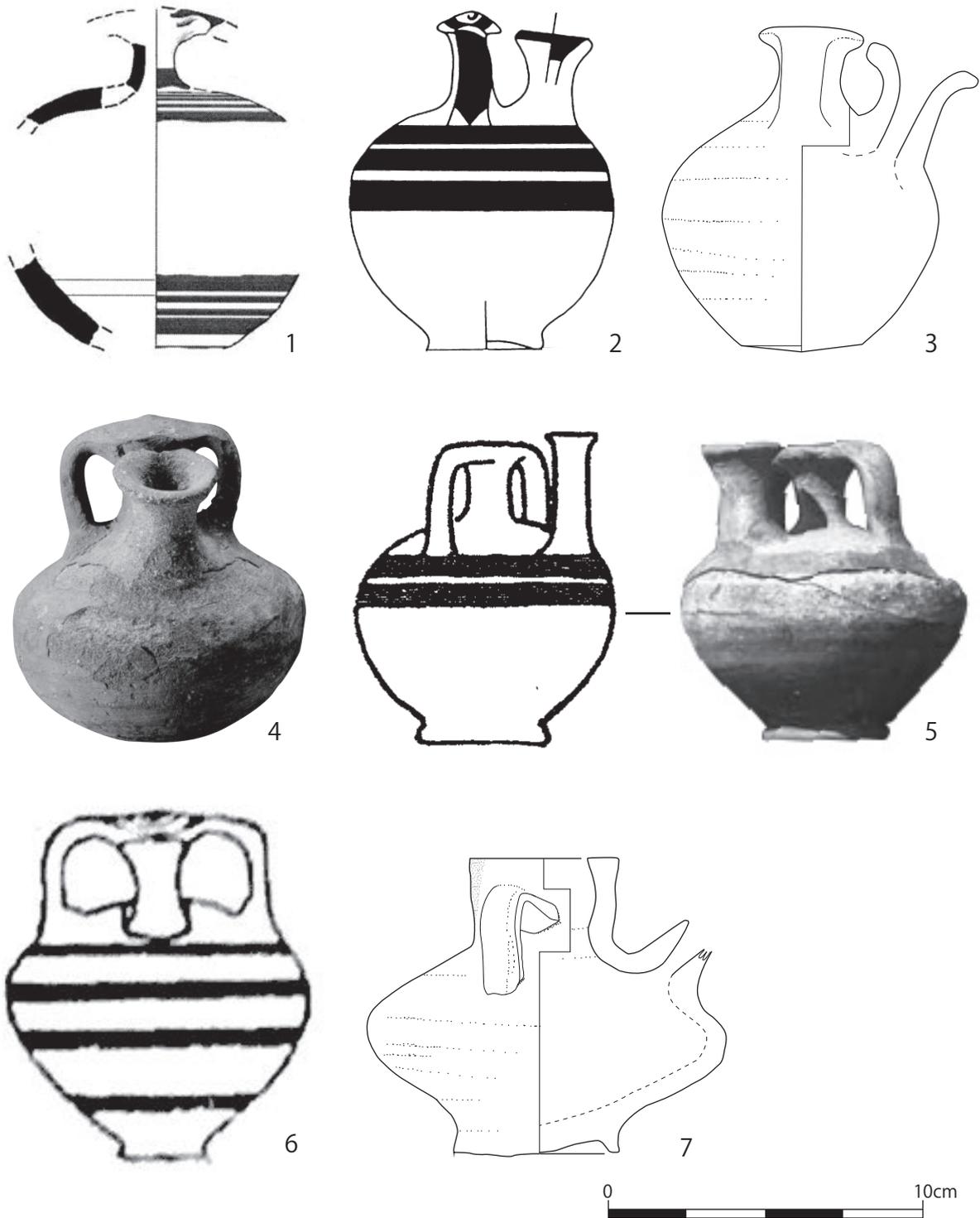


図8 模造土器 (2) (3, 7は筆者作成、その他は表中の参考文献内の図版を元に作成)

### 5-2-3. 文様

ファイアンス製の模造品は全てに何らかの装飾が施されているのに対し、模造土器の文様は非常に簡素で、何一つ装飾が施されていないものもある。また、鍔壺は本来肩部にも様々な装飾が施されるが、そのような装飾はエジプトで見つかった模造土器には描かれておらず、現在のところ確認されている文様は帯

のみである。この帯は太いものを複数描くものと、太い帯と細い線を組み合わせるものの2種類であるが、基本的には太い帯のみが描かれている。

### 5-2-4. 出土状況

18点の模造土器のうち、9点が墓から出土している<sup>11)</sup>。このうち6点が墓の構造に言及できる。P5は

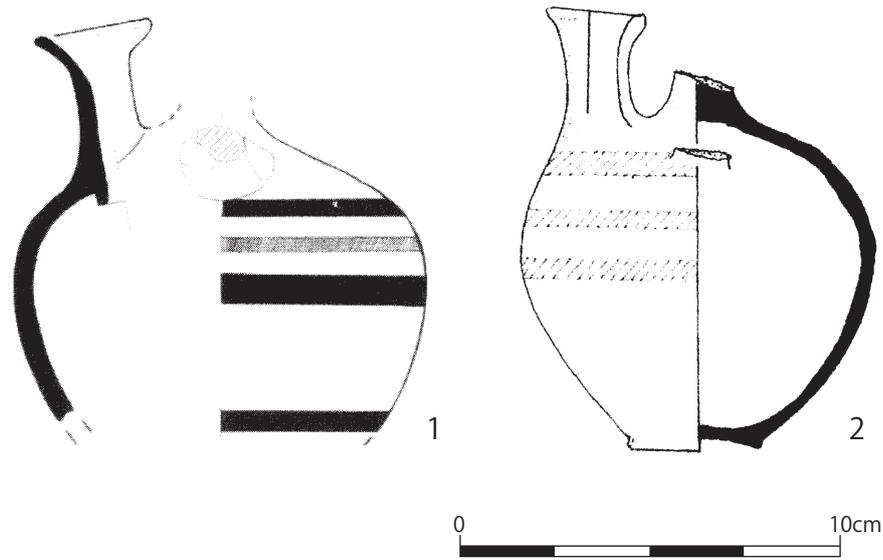


図9 ガスペリーニが示した類例 (Monchambert 2004, fig. 100. no. 1354; Laemmel 2012: 175, no. 936/19 を元に作成)

詳細が不明ながらも岩窟墓で出土している (Bourriau 1981: 138)。テル・エル＝ヤフーディヤ (Tell el-Yahudiyeh) 出土の3点 (P10, 11, 16) は土壙墓に陶棺と共に納められていた (Griffith 1890: 44, 46)。P12 は上部構造を伴うシャフト墓から出土している (Brunton and Engelbach 1927: 11)。バラビッシュで出土した P13 は報告書の墓リストに登録されておらず、具体的にどのような墓であるかは不明である。しかし、この遺跡で発見された墓は全て円形ないし長方形の土壙墓とされているため (Wainwright 1920: 3, pl. xv)、同様に土壙墓に納められていたと判断できる。

また、被熱一括遺物群からは2点出土している (P1, 2)。ガスペリーニによる最新の研究 (Gasperini 2018) で提示された解釈に従えば<sup>12)</sup>、この2点についても副葬品として用いられていた可能性が高い。

副葬品としての役割以外で用いられたのが、P8のテル・エル＝ボルグ出土資料である。これは第19王朝で利用された要塞で出土している。

### 5-3. 石 (図10)

石製の模造品は6点確認されている (表4)。製作年代の幅は第18王朝から第19王朝にかけてである (Schiller 2018: 59-60)。外部地域に輸出されている例として唯一知られているのが、図10に示したレヴァント地域のゲゼル (Gezer) で出土した鏡壺の模造品である (Sparks 2007: 39)<sup>13)</sup>。

#### 5-3-1. 整形技法と形状

器形は全て鏡壺で、素材はトラバーチンである。サッカラ (Saqqara) のマヤ (Maya) とメリト

(Merit) 墓で出土した S1 (図10. 1) は器高が 8.7 cm であるが、その他は約 5-6 cm 前後である。このことから、石製模造品もファイアンス製と同様、基本的に本来の鏡壺よりも小型に模造されていることがわかる。

ファイアンス製品や土器の製作方法とは異なり、石製品は基本的に原材料をくり抜いたり削ったりする「引き算」で成形していくことになる。したがって、開口部は狭い注口のみとなる鏡壺を石で模造する場合、容器の内部空間の創出方法が問題となる。この問題に対する解決方法は、大きく分けて以下の2つの方法が確認されている。

1つ目の方法は、本体を2つ以上のパーツに分割する方法である。この方法はグループ出土の資料 S2 (図10. 2) や、大英博物館所蔵の資料 S3 (図10. 3) で適用されている。S2では底部を穿孔することによって容器内部をくりぬいている。エアーズはこの資料に対して「部分的にくりぬかれている」と記述し、この模造品は後の被熱一括遺物群の土壙に埋納される際に、急速穿孔されたと指摘している (Ayers 2015: 1942)。しかし、実際に一次資料を見たところ、「部分的に」という説明は妥当とは言えず、この大きさでできる限りの器壁の薄さを実現し、内部空間を設けている。そして、接地する部分が水平になるように処理されている。このように実際には内面、底部共に非常に丁寧に処理されていることがわかる。S3については胴部の中央で分割することによって内部のくりぬき問題に対応している。注口は分離する方法が用いられている。ゲゼル出土資料に関しても S3と同様の方法が用いられた事が推測される。

内部空間を設ける2つ目の方法は、胴部や底部で分

表4 エジプトで作られた石製模造品

番号	器形	遺跡	サイズ (cm)	出土場所	博物館所蔵番号	出典	図版
S1	鍔壺	サッカラ	8.7(H), 7.8(W)	マヤとメリト墓、I室		Raven 2001, pl.32.53 Schiller 2018: 59(S2), 178	図10.1
S2	鍔壺	グラーブ	5.15(H), 5.4(W)	被熱一括遺物群	AM, AN 1890.997	Bell 1983: 20 Schiller 2018: 59(S1), 178, abb.66	図10.2
S3	鍔壺	テーベ?	4.82(H), 6.55(W)	不明	BM, EA 4656	Bell 1983: 20 Hankey 1995: 123, pl.24 Schiller 2018: 60(S3), 178, abb.65	図10.3
S4	鍔壺	出土地不明	6.0(H), 5.9(W)	不明	MFA, B	Vermeule 1982: 155.164 Bell 1983: 20 Schiller 2018: 60(S4), 178, abb.63	図10.4
S5	鍔壺	出土地不明	5.4(H), 5.45(W)	不明	ÄM, Berlin 13291	Buchholz 1974: 458 Bell 1983: 20 Schiller 2018: 60(S5), 178, abb.64	図10.5
S6	鍔壺	出土地不明	不明	不明	Bonn	Buchholz 1974: 458 Bell 1983: 20	なし

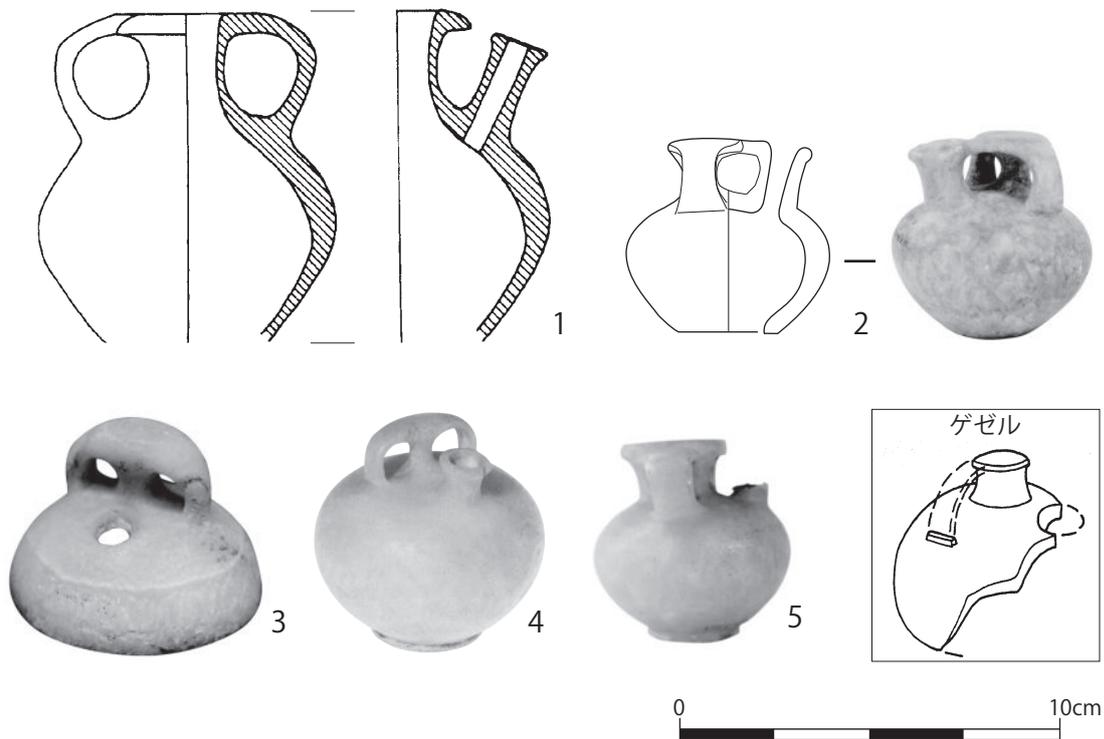


図10 石製の模造品 (2~3は筆者撮影及び作成。その他は表中の参考文献内の図版を元に作成)

割を行わない代わりに、本来の鍔壺では開口部が存在しない把手の中央部を開口部にし、頸部を作り出す方法である。このとき、口径は内部をくり抜くことができる程度にまで広げられる。この例の1つ目がS1で、注口は分離しておらず、本体と一体になっている。2つ目が、S5のベルリンのエジプト博物館に所蔵されている資料である (Bell 1983: 20)。

なお、どちらの方法がとられているか明らかでないのがS4 (図10.4) である。この資料は現在所在不明となっており、調査を行うことができない (Schiller 2018: 60)。刊行されている資料で、内部の状況について言及しているものがないため、その判断は不可能である。もし内部空間が創出されているとするならば、グラーブ出土資料のように、底部から穿孔する方

法が適用されたと考えられる。また、ボン大学に所蔵されていると言われているS6については、存在が知られているだけで、その形態的特徴については不明である。

#### 5-3-2. 出土状況

6点の石製模造品のうち出土状況が明らかになっているものは2点である。1点は被熱一括遺物群に含まれていたS2である。本来のコンテクストは失われているものの、先述の通りこの遺物群は副葬品だったことが指摘されているので (Gasparini 2018)、本資料も同様、副葬品であったと想定できる。

もう1つはマヤとメリト墓から出土したS1である。S1はこの墓のI室とJ通路で割れた状態で出土

しており (Raven 2001: 27)、原位置を特定するのは困難であるものの、近くで出土した宝飾品や化粧品などを入れていたと考えられる木製の箱との関連性を発掘者が指摘している (Raven 2001: 6)。この場合もやはり化粧品との関連性をうかがうことができる。また、被葬者であるマヤはツタンカーメン (Tutankhamun) からホルエムヘブ (Horemheb) の治世に「宝物庫の長」という役職をもっていた高官であり (Raven 2001: XXIII)、現在確認できる模造品の所有者の中ではとりわけ高い階層に属している。

## 6. 考察

### 6-1. 模倣の程度

以上行ってきた分析を踏まえ、まずは模造品の器形に関して述べておきたい。エジプトで出土している模造品の器形のそのほとんどが鏡壺に限定されているという事実は、エジプトで最も多く、そして広く流通していた器形であることが原因であると考えられる (cf. 有村 2018)。つまり、容器生産の職人の目に触れるミケーネ土器は、圧倒的に鏡壺が多かったのだろう。器形の再現度は個々の資料によって差があるものの、必ずしも工人の忠実に再現しようとする意思をうかがえないケースも多かった。これは模造土器と石製模造品に顕著な傾向であり、注口と双耳の把手をもつ特徴的な器形がおおむね再現できてさえいればよかったのだろう。

次に文様に関してだが、土器に関しては基本的に無装飾、もしくは線が描かれるのみで、ミケーネ土器に描かれた他の文様が模倣されている例はない。一方で、エジプトで作られたファイアンス製模造品にしば

しば描かれたジグザグ文様は、LH IIIC 期のミケーネ土器に描かれる文様を模倣しているとする指摘があった (Ayers 2015: 1938, 図 11)。そしてこの文様が描かれた模造品が、エジプトにおいて LH IIIC 期と平行する時期よりも早い年代で流通していたため、同文様は LH IIIC 期以前に既にギリシャで発達していたのではないかという主張までなされたのである (Ayers 2015: 1939)。

ここでエジプトで生産されたファイアンス製品に目を向けると、同様の文様が描かれた資料が複数あることがわかる (図 12. 1, 2)。ミケーネ土器の模造品に描かれているため、「ギリシャの文様」に見えるかもしれないが、実際には、この文様はエジプト在地で既に存在していたものと考えるのが妥当であろう。図 12. 1 は新王国時代に作られた、いわゆる「湿地図碗 (marsh bowl)」<sup>14)</sup> である (Allen 2005: 176-180)。この資料におけるジグザグ文様の使われ方に鑑みると、水を表現していることがわかる。ファイアンス製模造品の文様の分析で言及した資料も含めると、水の表現が非常に好まれていたことが指摘できる。そして、ナイル川流域の図像も描かれていたことと合わせて考えると、ファイアンス製模造品には再生復活のイメージがふんだんに盛り込まれているといえる。また、その他の文様にしても、新王国時代以前からファイアンス製品に描かれてきた文様であり (図 12. 3)、明確に模倣しようとした例は P23 のみである。このように、特にファイアンス製の模造品に関しては、器形は外部から借用したものである一方で、その素材及び装飾に関しては完全にエジプトのものに置き換わっている。本来の鏡壺や巡礼壺に施された装飾は重視されず、あくまでその内容物や機能が重視されていた結

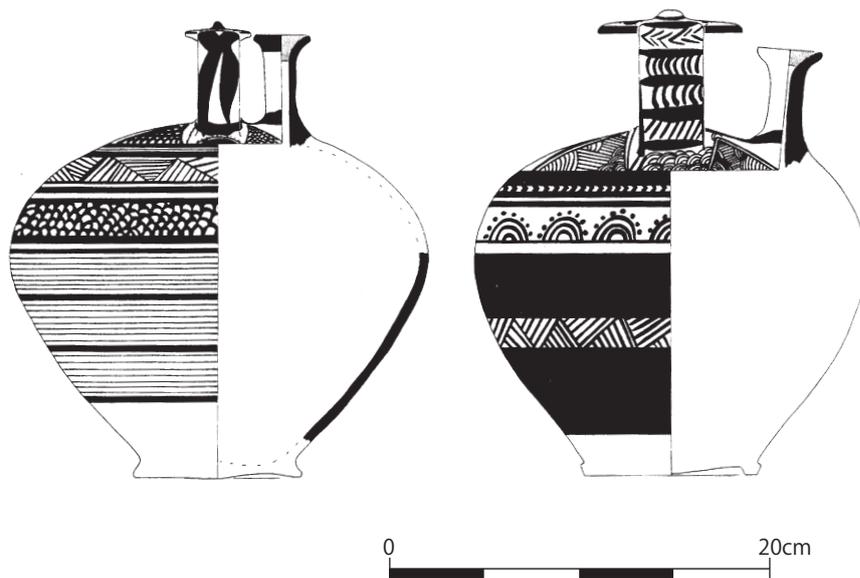


図 11 LH IIIC 期の鏡壺 (Mountjoy 1999, fig. 52 を元に作成)



図12 エジプトで作られたファイアンス製品とその文様 (Friedman 1998: 148, no. 143; Spurr et al. 1999: 30, no. 32; Allen 2005: 179, no. 104 を元に作成)

果、このような傾向に至ったのだと考えられる<sup>15)</sup>。

## 6-2. 模造品の生産地

まずファイアンス製模造品の生産地に関してだが、文様が共通してみられるものがあることは既に確認した通りである。もし、これらの文様がミケーネ土器の模造品にだけ描かれていたものであれば、ベルが指摘する通り (Bell 1983: 19)、ある特定の工房を想定することもできるだろう。しかし、実際はそうではない。先述の通り、こういった文様はミケーネ土器の模造品が生産される以前から、エジプトでは古くからファイアンス製品に描かれてきているものである。そして、各文様の描き方や描く場所に関しても、場所の離れた工房間でもある程度共通のアイデアを持っていた可能性がある。そのため、類似する文様をもつ模造品が、異なる工房で同時多発的に製作されたことも想定できるのである。したがって、共通する文様をもつ資料が必ずしも同一工房で製作されたと判断できるわけではなく、ベルが特定の工房の存在を想定した根拠

である文様の類似性は、その根拠としては弱いことがわかる。

模造土器に関しては、現段階で確実にエジプトで作られたと判断できる物は P10, 11, 14, 18 の 4 点、そして P12 をマークレイだとするならば 5 点となる。これらはそれぞれ独自の方法を用いて製作「1 点物」であるため、特定の工房などを想定することは難しい。

似通った特徴をもつ洋梨形の燈壺の模造土器 7 点に関してはある特定の工房もしくは地域で生産がされていた可能性が高い。ただし、エアーズやガスペリーニのように、現段階でそのいずれかを想定して議論を進めるのはあまり意味をなさない。あくまでもシンプルスタイルとは異なる模造品生産を集約的に行っていた工房や地域があるという点については、興味深い発見といえるのではないだろうか。これらは今後 NAA などを用いた分析を行っていく必要性があり、その分析結果は当該期の東地中海地域における模造土器の流通を考える上でも重要となるだろう。

また、P9 と P12 は実際のところ、先述した通りシ

ンプルスタイルと判断するのが妥当である。そして鏡壺のシンプルスタイルの生産地はこれまでのところキプロス島やレヴァント地域でしか確認されていない (Mountjoy and Mommsen 2001)。したがって、先行研究ではこれらはエジプト製とされていたが、実際にはレヴァント地域やキプロス島で製作された可能性が高い。

石製模造品に関しても、内部空間の創出方法に共通するものがあるものの、全てが異なる特徴を持ち合わせているため、特定の工房で生産されていたとはいえない。

### 6-3. 模造の目的と模造品の利用

最後に鏡壺や巡礼壺を模倣した要因、そしてその利用に関して考えていきたい。まず模造土器に関しては副葬品として出土する場合と、具体的な用途は不明であるものの、P8のように日常的に利用されていた事が想定される場合の2例があった。そして、大きさは本来のミケーネ土器と大きく変わるものではなかった。

一方で、ファイアンス製や石製模造品は、ほとんどが博物館収蔵資料ではあるが、出土状況が明らかになっている資料については全て墓から出土している。そしてサイズも小型化されている。本来の鏡壺や巡礼壺はもともと小型かつ貴重な油を入れる良質な容器であり、古代エジプトで副葬品としても頻繁に用いられていた化粧用容器との親和性が高い (e.g. Bell 1983: 17)。ベルはファイアンス製鏡壺に関してのみに言及したが、ファイアンスに加えて石でも模造されたのは、エジプトにおける化粧用容器の素材としてよく用いられていたからであろう。そして、鏡壺や巡礼壺よりも小型のものが多い在地の化粧用容器に合わせるために、小型化して模造したと考えられる。以上のことに加え本来の鏡壺に描かれたような文様ではなく、エジプト在地の再生復活に関わる文様が描かれていたことから、ファイアンス製と石製模造品は副葬品に特化して生産されていた可能性が高い。これは、副葬用と日常利用の2つの目的で生産された模造土器とは異なる<sup>16)</sup>。

また、内容物が分析された例がないため、断定はできないものの、少なくともファイアンス製と石製の模造品が化粧用容器として利用されていた状況を踏まえると、この2種類の模造品には、香油の類が入れられていたのではないだろうか。

では、どういった人々がミケーネ土器の模造品を手にすることができたのだろうか。ミケーネ土器の場合、王族や高官といった高い社会階層に属する人々との結びつきが強いことが指摘されている (Kelder 2010; 有村 2018)。しかし、模造品に関していえば、マヤとメリト墓で出土している1点を除くと、ミケー

ネ土器のように明確に王族や高官と結びつく傾向は見られない。むしろ、アクエンアテンの治世以降ミケーネ土器の副葬が確認されていない墓構造である土墳墓での出土例が複数確認されているという事実は、模造品がミケーネ土器よりも入手しやすかったことを示しているのではないだろうか。ミケーネ土器を入手することができなかった階層の人々にとって、模造品はその代替品として利用されていたのかもしれない。

また、エジプトで作られた模造品は当該地域での利用にとどまらず、レヴァント地域やキプロス島でも出土していることを確認したが、これらも同様に副葬品として用いられることが多かった。ただし模造品とともに、内容物もエジプトから外部地域へ移動したのか否かという点については不明である。もちろん内容物が入った状態で輸出された可能性を否定することはできない。冒頭で述べたように、後期青銅器時代の東地中海地域では、小型の土器を容器として高価な油や液体、内容物が輸送されていた。しかし、当時のエジプトではそのような輸送に向けた小型の容器(土器)は生産されておらず、アンフォラでさえもあまり多くは輸出されていない。その一方でレヴァント地域やキプロス島の両地域では、内容物を目的としないような、エジプトで作られたファイアンス製品や石製品が多くもたらされている (Jacobsson 1994)。このような状況を考慮すると、内容物を目的として容器が流通したというよりは、その容器自体に価値が見出されたため、レヴァント地域やキプロス島で輸入されたのではないだろうか。外来の文化(ミケーネ土器の器形)に独自の文化(素材や文様)を付与し、ハイブリッドな製品を作って輸出するといった、それ以前のエジプトでもあまり見られない興味深い現象をミケーネ土器の模造品をめぐって看取することができるのである。

以上行ってきた模造品の製作及び利用の側面についての考察をまとめると、図13のように表すことができるだろう。

## 7. まとめ

エジプトで多く流通したミケーネ土器の鏡壺や巡礼壺といった器形は、主に小型で香油を入れるという点において在地の化粧用容器と親和性が高かったことから、模造されることになった。そして、日常的な利用も視野に入れた模造土器とは異なり、ファイアンス製や石製模造品は副葬品に特化して生産されていた可能性が高いことが明らかになった。また、ファイアンス製模造品に関しては、器形に加え文様も模倣していると考えられていたが、実際には以前からエジプトで用いられていた文様であるとする方が妥当であることを指摘した。そのため、ミケーネ土器が与えた影響は、

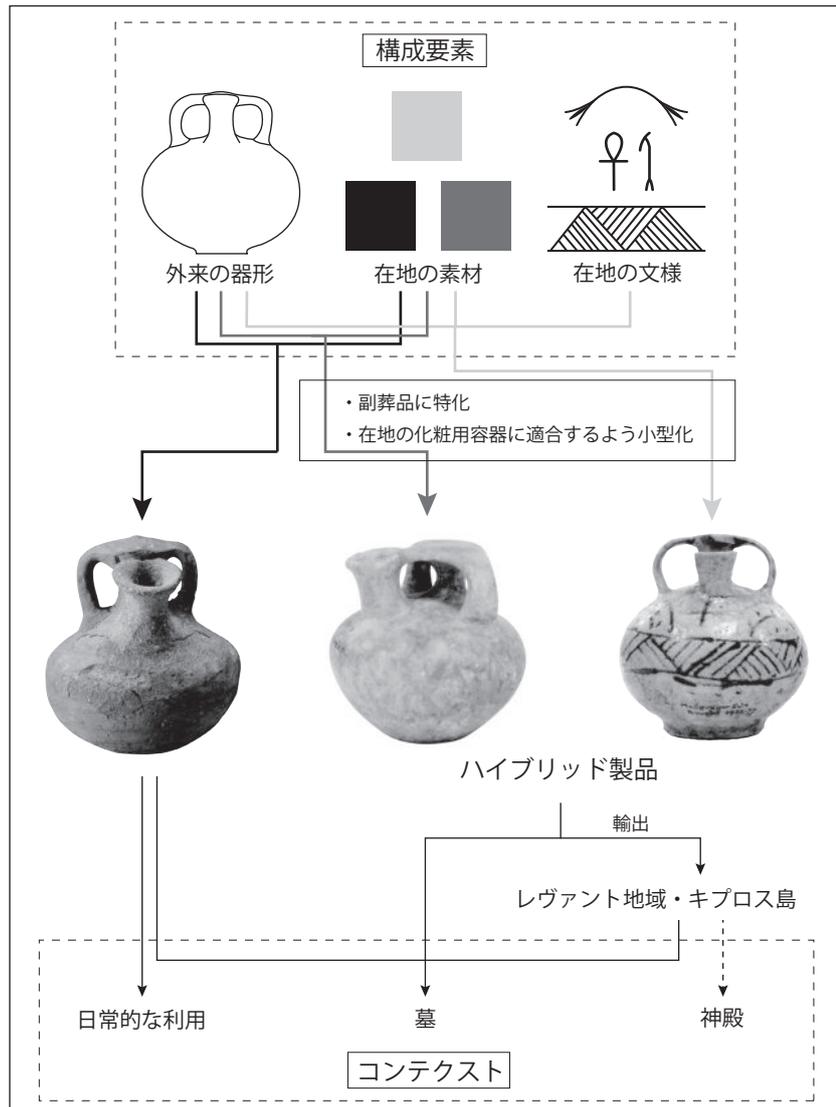


図13 模造品の生産から利用までの流れ

あくまでもその器形や機能性の面においてのみであり、製作された模造品の器形以外の要素については、ほぼ「エジプト的」な文脈に置き換わっていたといえる。この文化的にハイブリッドな製品は、工芸品としてエジプトの外部地域に輸出されるケースもあった。

模造品の所有者に着目してみると、本来のミケーネ土器が王族や高官との結びつきが強かったのに対し、土壌墓といった比較的簡素な墓からも出土している例を複数確認することができた。このことから、「本物」を手にすることができなかった階層の人々が、その代替品として入手していた可能性も指摘できるだろう。

また、これまでエジプト製とされてきた模造土器については、その生産地に関する判断を保留すべき資料が多いことが明らかとなった。「1点物」の模造土器が複数存在する一方で、類似する特徴を持ち合わせる一群が存在することもわかった。この一群が生産された場所は現段階で特定することはできないものの、シ

ンプルスタイルとは異なった共通の特徴をもつ模造品の生産を行っていた工房や地域が存在したことを想定できる。

いずれにせよ、ミケーネ土器の模造品がエジプトで流通したのは第20王朝までで、その後ミケーネ土器に影響を受けたと考えられる容器が製作された様子をうかがうことはできない。したがって、ミケーネ土器がエジプトにおける容器生産に与えた影響は、当該土器が流通する間の一時的なものだったといえる。

#### 謝辞

本稿は、2019年1月に早稲田大学に提出した修士論文の一部を大幅に修正加筆したものである。修士論文の執筆にあたっては、当時の指導教授であった近藤二郎先生をはじめ、多くの方々からご教示を賜った。資料調査の際にはアシュモレアン博物館のリーム・マクナマラ博士、ピートリ博物館のアンナ・ガーネット博士、アリス・ウィリアムズ氏に多大なる助力を得た。また、査読者の方々からは多くの貴重なご指摘を頂いた。

ここに記して御礼申し上げる次第である。

## 註

- 1) 19世紀末に金属製燈壺の出土が報告され (von Bissing 1899: 57)、その記述が現在でも引用されることがある (e.g. Sparks 2007: 39)。しかし詳細な調査を行なったベルは報告が事実誤認であることを指摘したため、現在その存在は否定されている (Bell 1982: 15-16)。
- 2) 被熱一括遺物群は様々な容器や化粧用道具、装身具等が納められた土壌で、火を受けた痕跡がある。この遺物群はグループで複数見つかった。ミケーネ土器が多く出土しており、ファイアンス製、石製、粘土製模造品も複数出土している。この土壌の性質についてはいくつかの解釈が提示されてきたが、ガスパーリーニによる最新の研究では、近辺の墓を盗掘した盗掘者が不要なものをまとめて廃棄した結果生じたものだとされている (Gasperini 2018)。
- 3) ミケーネ土器のファイアンス製模造品はシリアでも生産されているが、本稿では描かれている文様に着目して、エジプト製であるか否かを判断している。
- 4) 本稿では、これ以降アルファベットと数字を用いて各資料を指し示していくが、それぞれ「F」は「ファイアンス製模造品 (Faience imitation)」、 「Fex」は「輸出されたファイアンス製模造品 (Exported faience imitation)」、 「P」は「模造土器 (Imitation pottery)」、 「S」は「石製模造品 (Stone imitation)」の省略表記である。  
また、表4~7中の所蔵先を表す略号は以下の通りである。AKM=アウグスト・ケストナー博物館、AM=アシュモレアン博物館、ÄM=ベルリンエジプト博物館、BM=大英博物館、BMAH=ブリュッセル歴史美術博物館、CM=カイロ博物館、CyM=キプロス博物館、ECM=イートンカレッジ博物館、FM=フィッツウィリアム博物館、MdL=ルーブル美術館、MCAB=ボローニャ市立考古博物館、MFABo=ボストン美術館、MFABu=ブダペスト美術館、MM=マンチェスター博物館、MMA=メトロポリタン美術館、MRAH=ベルギー王立美術・歴史博物館、PCSG=ピサ大学シフ・ジョルジーニコレクション、PM=ペンシルヴァニア大学考古人類学博物館、SCÉ=ストラスブール大学エジプトコレクション、SLAM=聖ルイス美術館、UCL=UCL ピートリ博物館、UGM=ウプサラ大学グスタヴィアナム博物館。
- 5) 大英博物館所蔵のファイアンス製燈壺 (所蔵番号 1970, 0622.5) は確実にエジプト製とは判断できないため、除外してある。肩部一面に施された水玉文様はエジプト製燈壺には見られない文様であり、どちらかというとしリアで作られた模造品とよく似ている (e.g. Matoian 2003: figs. 9, 10)。
- 6) 例外的に高さが15 cm近くになる資料が一点だけある (F27, 図4. 15)。この資料については、その真偽について依然明らかではないが、近現代の贋作の可能性も指摘されている (Schiller 2018: 51-52, 208)。
- 7) ミケーネ文化期ギリシャ (Mycenaean Greece) の時期区分に使われるミケーネ土器編年の用語で、後期ヘラディック III B 期 (Late Helladic III B) を略したものである。LH III B 期は概ねエジプトの新王国時代第18王朝末から第19王朝と平行する (Manning 2010: 23)。
- 8) シラーはコム・フィリンで出土し、現在カイロ博物館に所蔵されている燈壺 (JE 89421) を模造土器として登録しているが (Schiller 2018: 176)、これは事実誤認である。
- 9) 現在のところ、エジプトで生産された模造土器がレヴァント地域やキプロス島といった外部地域で出土した例は報告されていない。

- 10) エアーズは脚注39でこれらの土器の図版としてピートリの報告書を引用しているが、多くの誤りがある。まず、pl.xvii:3は大英博物館に所蔵されているA984であり、AN1890.891ではない。実際のAN1890.891は報告書には刊行されておらず、ガスパーリーニによって最近出版されている (Gasperini 2018: 28)。また、pl.18:52は正しくはAN1890.973であり、これは明らかにエーゲ海地域の胎土の輸送用燈壺で模造品ではない。そしてpl.19:12がAN1890.990であり、AN1890.1074は未刊行である。
- 11) 残念ながら以上の9点の中に具体的に本来置かれていた位置にまで言及できる資料はない。
- 12) 註2を参照のこと。
- 13) この資料はゲゼルのトレンチ20で、発掘者のR. A. S. マカリスター (Macalister) によって区分された、第二セム期 (second Semitic period, B.C. 1800-1400) に年代づけられる層から出土している (Macalister 1912a: 164-165; 1912b: 341; 1912c: pl.ccxii-16)。この時期のトレンチ20には居住域、頭蓋骨の山、そして著名な巨石群 (high place) などの遺構があるが、その帰属先については言及されていない。なお、レヴァント地域の石製容器を収集したスパークスは第一セム期 (B.C. 2500-1800) として登録し、帰属年代に疑問を呈しているが (Sparks 2007: 307, no.341)、これはマカリスターの報告の誤った引用である。ただし、第二セム期でも東地中海における燈壺の流通開始時期に先行するため、実際にはもう少し後の時代に年代づけられるものと思われる。
- 14) 水を表すモチーフや、魚やロータスといった水辺の動植物の図が描かれたファイアンス製の碗である (Allen 2005)。
- 15) エジプトにもたらされた輸入土器には、その装飾的な面も模倣された例がある。例えば、クレタ島で生産されていたカマレス土器は、非常に華やかな装飾が施され、開口器形のものも多かった。そしてエジプト人は器形もしくは文様を模倣し在地の土器に取り入れることによってミノア的な要素を表現した (Barrett 2009)。このようにミケーネ土器とは異なり、カマレス土器の場合はその土器自体の装飾に価値を見出していたことがうかがえる。
- 16) 模造品が本来のミケーネ土器の大きさから小型化しているという事実からは、実用性よりも記号としての役割が重視されていた可能性を想定することもできるだろう。なぜなら、エジプトでは実用的とは言えないほどに小型化した「ミニチュア容器」が、葬送儀礼を目的に利用されることがしばしばあったからである (e.g. 吉村ほか 2013: fig. 4)。また、新王国時代第18王朝のトトメス3世の外国人妻の墓から出土した石製容器には、その器形だけを再現すればよかったのか、内部が極めて粗雑に処理され実用性を持たないものもある (Lilyquist 2003: figs. 129-131)。そのため実際に内容物を保持する容器としての機能は想定されていなかったことがうかがえる。このような例がある一方で、エジプト製のミケーネ土器模造品には、容器としての機能を喪失している物はない。石製模造品に関しても、様々な工夫をこらしながら綺麗に中がくりぬかれていることから、実用的な機能を備えていたといえるのではないだろうか。それはグループ出土の石製模造品に関しても同様で、先に述べたデポジットされる際に急遽穿孔されたとする考え方はあまり妥当とは言えない。そして、接地面が水平になるよう丁寧に処理されていることを考えれば、本来はストッパーが存在したと想定するのが自然であろう。上記のトトメス3世の外国人妻で例に出したようなことが、エジプトでは伝統的に行われてきているという状況を踏まえると、内部も丁寧に処理をしたミケーネ土器の模造品の製作者は、ある程度実用的な機能性も重要視していたと考

えられる。

#### 参考文献

- Allen, S. J. 2005 Faience Bowls. In C. H. Roehrig (ed.), *Hatshepsut: From Queen to Pharaoh*, 176–180. New Haven and London, Yale University Press.
- Ayers, N. D. 2015 Egyptian Imitation of Mycenaean Pottery. In P. Kousoulis, and N. Lazaridis (eds.), *Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists, University of the Aegean, Rhodes, 22–29 May 2008, 1935–1949*. Leuven, Peeters.
- Badre, L., M. C. Boileau, R. Jung, H. Mommsen, and M. Kerschner 2005 The Provenance of Aegean and Syrian Type Pottery Found at Tell Kazel (Syria). *Ägypten und Levante* 15: 15–47.
- Barrett, C. E. 2009 The Perceived Value of Minoan and Minoanizing Pottery in Egypt. *Journal of Mediterranean Archaeology* 22/2: 211–234.
- Bell, M. R. 1982 Preliminary Report on the Mycenaean Pottery from Deir el-Medina (1979–1980). *Annales du Service des antiquités de l'Égypte* 68: 143–164.
- Bell, M. R. 1983 Egyptian Imitations of Aegean Vases. *Göttinger Miszellen* 63: 13–24.
- Ben-Tor, D. 2016 *Pharaoh in Canaan: The Untold Story*. Jerusalem, Jerusalem Israel Museum.
- Bietak, M. 1975 *Der Fundort im Rahmen eines archäologischen Untersuchung über das ägyptische Ostdelta. Tell el-Dab'a 2*. Vienna, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- von Bissing, F. W. 1899 Funde und Erwerbungen in und aus Ägypten 1897–1898/99. *Archäologischer Anzeiger* 14: 57–59.
- von Bissing, F. W. 1902 *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire: Fayencegefäße*. Vienne, Imprimerie Adolff Holzhausen.
- Bourriau, J. 1981 *Umm el-Ga'ab. Pottery from the Nile Valley before the Arab Conquest*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Brunton, G. and R. Engelbach 1927 *Gurob*. London, British School of Archaeology in Egypt.
- Buchholz, H. Z. 1974 Ägäische Funde und Kultureinflüsse in den Randgebieten des Mittelmeers. Forschungsbericht über Ausgrabungen und Neufunde, 1960–1970. *Archäologischer Anzeiger* 89: 325–483.
- Cesnola, L. 1903 *Descriptive Atlas of the Cesnola Collection of Cypriot Antiquities in the Metropolitan Museum of Art, New York. Vol. III*. Boston, J. R. Osgood.
- Friedman, F. D. 1998 *Gifts of the Nile: Ancient Egyptian Faience*. London, Thames and Hudson.
- Friedman, R. 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Cemeteries of Hemamieh, Nagada and Hierakonpolis*. Unpublished dissertation, University of California at Berkeley.
- Furtwängler, A. and G. Loeschcke 1886 *Mykenische Vasen: vorhellenisch Thongefäße aus dem Gebiete des Mittelmeeres*. Berlin, A. Asher.
- Furumark, A. 1941a *Mycenaean Pottery: Analysis and Classification*. Stockholm, Svenska institutet i Athen.
- Furumark, A. 1941b *Mycenaean Pottery II: Chronology*. Stockholm, Svenska institutet i Athen.
- Gasperini, V. 2014 Mycenaean and Cypriot Pottery from Gurob in the Manchester Museum Collection: A test of Trade Network Theories for the New Kingdom Fayum. *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 6/2: 10–22.
- Gasperini, V. 2018 *Tomb Robbery at the End of the New Kingdom: The Gurob Burnt Groups Reinterpreted*. Oxford, Oxford University Press.
- Giorigini, S. 1961 Soleb: Campagna 1959–60. *Kush* 9: 182–184.
- Griffith, F. L. 1890 *The Antiquities of Tell el Yahudiyeh*. London, K. Paul.
- Hall, H. R. 1901 *Oldest Civilization of Greece*. London, David Nutt.
- Hankey, V. 1993 Pottery as Evidence for Trade: Egypt. In C. Zerner, P. Zerner and J. Winder (eds.), *Wace and Blegen. Pottery as Evidence for Trade in the Aegean Bronze Age 1939–1989. Proceedings of the International Conference held at the American School of Classical Studies at Athens, December 1989*, 109–115. Amsterdam, J. C. Gieben.
- Hankey, V. 1995 Stirrup Jars at El-Amarna. In W. J. Davies and L. Schofield (eds.), *Egypt, the Aegean and the Levant: Interconnections in the Second Millennium BC*, 116–124. London, British Museum Press.
- Hoffmeier, J. K. (ed.) 2014 *Excavation in North Sinai: Tell el-Borg I*. Indiana, Eisenbrauns.
- Jacobsson, I. 1994 *Aegyptiaca from Late Bronze Age Cyprus*. Jonsered, P. Åströms förlag.
- Kelder, J. M. 2010 *The Kingdom of Mycenae: A Great Kingdom in the Late Bronze Age Aegean*. Bethesda, CDL Press.
- Koehl, R. B. 2006 *Aegean Bronze Age Rhyta*. Philadelphia, INSTAP Academic.
- Koehl, R. B. and J. Yellin 2007 What Aegean “Simple Style” Pottery Reveals. In P. P. Betancourt, M. C. Nelson and H. Williams (eds.), *Krinoi kai Limenes: Studies in Honor of Joseph and Maria Shaw*, 199–208. Philadelphia, INSTAP Academic Press.
- Laemmel, S. 2012 A Note on the Material from the Late Bronze Age and Early Iron Age Cemeteries of Tel el-Far'ah South. In C. Bachhuber and R. G. Roberts (eds.), *Forces of Transformation: The End of the Bronze Age in the Mediterranean*, 170–185. Oxford, Oxbow Books.
- Leclant, J. 1963 Fouilles et Travaux en Égypte et au Soudan, 1961–1962 II: Fouilles au Soudan et Découvertes hors d'Égypte. *Orientalia* 32: 184–219.
- Lilyquist, C. 2003 *The Tomb of Three Foreign Wives of Tutmosis III*. New York, Yale University Press.
- Macalister, R. A. S. 1912a *The Excavation at Gezer 1902–1905 and 1907–1909: Vol. I*. London, Murray.
- Macalister, R. A. S. 1912b *The Excavation at Gezer 1902–1905 and 1907–1909: Vol. II*. London, Murray.
- Macalister, R. A. S. 1912c *The Excavation at Gezer 1902–1905 and 1907–1909: Vol. III*. London, Murray.
- MacIver, D. R. and C. Woolley 1911 *Buhen. Text*. Philadelphia, University Museum.
- Manning, S. W. 2010 Chronology and Terminology. In E. H. Cline (ed.), *The Oxford Handbook of the Bronze Age Aegean*, 11–30. Oxford, Oxford University Press.

- Matoian, V. 2003 Aegean and Near Eastern Vitreous Materials: New Data from Ugarit. In N. C. Stampolidis and V. Karageorghis (eds.), *Ploes: Sea Routes. Interconnection in the Mediterranean, 16th-6th c. BC. Proceeding of the International Symposium Held at Rethymnon, Crete, September 29th-October 2nd, 2002*, 151-162. Athens, University of Crete and the A. G. Leventis Foundation.
- Monchambert, J.-Y. 2004 *La céramique d'Ougarit: Campagnes des Fouilles 1975 et 1976*. Paris, Éditions Recherche sur les Civilisations.
- Mountjoy, P. A. 1999 *Regional Mycenaean Decorated Pottery*. Heidelberg, M. Leidorf.
- Mountjoy, P. A. and H. Mommsen 2001 Mycenaean Pottery from Qantir-Piramesse, Egypt. *The Annual of the British School at Athens* 96: 123-55.
- Myres, J. 1914 *Handbook of the Cesnola Collection of Antiquities Cyprus*. New York, Metropolitan Museum of Art.
- Payne, J. C. 1993 *Catalogue of Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*. Oxford, Clarendon Press.
- Petrie, W. M. F. 1891 *Illahun, Kahun and Gurob*. London, David Nutt.
- Petrie, W. M. F. 1894 *Tell el Amarna*. Warminster, Methuen.
- Petrie, W. M. F. 1906 *Hyksos and Israelite Cities*. London, Office of School of Archaeology.
- Raven, M. J. 2001 *The Tomb of Maya and Meryt II: Objects and Skeletal Remains*. London and Leiden, Egypt Exploration Society.
- Rose, P. 2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*. London, Egypt Exploration Society.
- Säve-Söderbergh, T. 1964 Preliminary Report of the Scandinavian Joint Expedition: Archaeological Investigations between Faras and Gemai, November 1962- March 1963. *Kush* 12: 19-39.
- Schaeffer, C. F. A. 1952 *Enkomi-Alasia*. Paris, Librairie C. Klinksieck.
- Schiller, B. 2018 *Handel in Krisenzeiten: Ägyptische-mykenische Handelsbeziehungen in der Ramessidenzeit*. Oxford, Archaeopress.
- Sparks, R. T. 2007 *Stone Vessels in the Levant*. Leeds, Taylor and Francis.
- Spencer, N. 2008 *Kom Firin I: The Ramesside Temple and the Site Survey*. London, British Museum.
- Spiegelberg, W. 1909 *Ausgewählte Denkmäler der Ägyptischen Sammlung der Kaiser Wilhelm-Universität Straßburg*. Straßburg, Schlesier & Schweikhardt.
- Spurr, A., N. Reeves and S. Quirke 1999 *Egyptian Art at Eton College: Selections from the Myers Museum*. Windsor and New York, Eton College and the Metropolitan Museum of Art.
- Stubblings, F. H. 1951 *Mycenaean Pottery from the Levant*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Tufnell, O. 1940 *Lachish II: The Fosse Temple*. Oxford, Oxford University Press.
- Vermeule, E. 1982 Egyptian Imitations of Aegean Vases. In R. Freed (ed.), *Egypt's Golden Age: The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 B.C.*, 152-158. Boston, Museum of Fine Arts.
- Wainwright, G. A. 1920 *Balabish*. London, G. Allen and Unwin.
- Yon, M., V. Karageorghis and N. Hirshfeld 2000 *Céramiques Mycéniennes d'Ougarit*. Nicosie, Éditions Recherche sur les Civilisations.
- 有村元春 2018 「エジプト出土のミケーネ土器再考」『エジプト学研究』24号 113-157頁。
- 馬場匡浩 2013 『エジプト先王朝時代の土器研究』 六一書房。
- 吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・竹野内恵太・山崎世理愛 2016 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第22次調査—」『エジプト学研究』22号 91-112頁。
- 吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一 2013 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第18次発掘調査—」『エジプト学研究』19号 15-43頁。